

宇都宮宮

宇都宮宮
山 山 鳥 心
隕 乃 佳

山、水、之、有、南、北、兩、所、其、代、故、其、地、而、宋、元、已、下、分、其、處、矣、矣、南、北、各、換、其、時、其、地、既、別、然、終、不、下、取、要、之、地、宗、
宗、後、封、山、林、則、動、靜、皆、有、其、地、而、石、者、得、不、以、南、而、為、準、則、矣、其、東、方、之、於、此、世、不、之、也、惟、乎、而、其、不、殊、於、出、乎、北、也、夫、
夫、東、者、也、元、和、建、善、之、後、奉、述、大、昌、百、事、辰、趨、於、古、於是、欽、伯、玉、柳、公、美、地、美、地、使、車、鳴、士、大、興、而、南、宮、與、湯、湯、
七、者、下、七、州、那、須、野、成、虎、野、人、也、其、父、以、取、雷、為、業、而、山、人、不、喜、商、賈、性、恬、靜、好、事、如、規、之、求、乳、其、來、江、都、也、
鹿、死、訖、不、知、降、日、日、自、首、曰、此、年、正、日、最、非、是、乃、人、造、也、之、所、高、其、乃、則、亦、於、池、以、辰、者、其、地、人、不、能、辨、其、
亦、有、百、方、危、請、于、自、傳、之、算、年、之、久、其、水、防、乎、杜、理、律、復、在、平、矣、及、漢、皇、就、古、寺、大、利、觀、其、靈、書、書、鳴、鳴、誌、斯、
也、四、有、野、得、乃、作、數、則、以、辨、之、其、易、矣、如、此、既、運、江、都、則、技、盜、進、賊、益、高、其、事、善、山、非、若、昨、梅、山、相、前、遂、而、皆、無、不、
之、者、又、與、余、吾、父、波、腹、有、太、甚、矣、父、突、古、者、書、如、林、命、官、琴、頭、入、神、而、山、人、禮、能、辨、其、其、其、其、其、也、其、其、其、其、
建、造、神、理、非、林、之、以、穴、址、此、之、春、其、天、於、其、才、琴、名、新、佛、道、通、持、精、素、美、者、說、解、於、其、乃、甚、晚、而、山、房、于、樂、研、善、將、大、
而、而、地、自、南、之、危、其、北、門、也、以、不、其、自、領、前、選、一、畫、則、山、人、其、亦、可、以、也、大、山、大、為、人、担、事、精、神、不、其、其、其、
其、有、地、者、則、可、以、支、曰、在、宇、都、宮、後、其、其、君、以、成、者、古、乃、日、夜、扶、升、所、難、於、其、日、畫、學、之、博、其、其、其、其、
之、而、止、其、
十、余、其、
安、欣、二、年、歲、在、乙、卯、夏、四、月、江、都、大、德、正、日、開、撰、又、宇、都、宮、廟、地、取、中、書、并、大、興、神、佛、使、御、及、編、

宇都宮市教育委員会

表紙写真
霽厓山人碑
(観専寺)

文化財シリーズ 第4号

宇都宮のいしぶみ

昭和56年 2月

宇都宮市教育委員会

序 文

私たちの郷土、宇都宮市は、古い歴史を持ち、先人の残した数多くの文化遺産があります。

しかし、これらの文化遺産も時代や生活様式の変化とともに忘れられ、あるいは見過ごされがちであります。

市教育委員会では、郷土の文化遺産を一人でも多くの人々に紹介し、日常生活の中から生まれた先人の知恵を見直してもらおうとの願いから、文化財シリーズとして「宇都宮の民俗」、「民家と家並」、「手仕事」といった身近かな生活のなかに題材を求め、紹介に努めてまいりました。

本年度は、歴史的な出来事や先人の偉業をたたえた石碑について、昭和54年度に調査した一部を「宇都宮のいしぶみ」として紹介いたします。

本市には、その歴史を刻んだ石碑が市内各所に残されており、これをたどっていけば貴重な宇都宮の歴史の流れがそこに現われてきます。

石碑は、小さいものから大きいものまでその形は様々ですが、いずれも限られた碑面に当時の歴史を凝縮して今日に伝えております。

この文化遺産の所在と碑文の調査結果をここにおおくりいたしますので、この冊子が郷土の歴史を理解する資料の一部として、各分野の研究の一助になれば幸いです。

最後に、本冊子の刊行に当たり、調査、編集に携われた本市文化財保護審議委員及び文化財調査員並びに御協力をいただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和56年2月

宇都宮市教育委員会
教育長 後藤 一 雄

目 次

序 文	後 藤 一 雄
いしぶみに想う	野 中 退 蔵
ま え が き	1
掲載いしぶみ一覧	2
1. 市指定文化財の石碑	3
2. 旧跡関係の石碑	7
3. 人物顕彰の石碑	12
4. 文芸関係の石碑	29
5. その他の石碑	33
あ と が き	38

いしぶみに想う

宇都宮市文化財保護審議委員会

委員長 野中退蔵

木もれ日の中にひっそりと息づいている石碑—この石碑に数々の含蓄ある事実が秘められています。

あるものは、人や地域の歴史が、あるものには、風雅を極めた和歌や俳句が、その限られた碑面に刻み込まれています。

今日、歴史書や古文書は、おおむね図書館や書店などで手に入れることができますが、石碑は、市内の各所を足で探し回らなくてはなりません。

このたび、市内に点在している石碑を一冊の本にまとめたことは、別の角度から郷土の歴史を探ることができ、今後この方面の研究の指針として活用いただけるものと思います。

この本を手にとられた方は、是非一度お近くの現地を訪れ、実物を御覧になれば必ずや先人の偉業に心を打たれることでしょう。

また、真に理解を深めるためには、各々の石碑の歴史を郷土史と比較検討されるときともに、他の石碑との相互関係を十分に研究されることをお願いいたします。

本書が、数多くの人々に読まれ、少しでも文化財への理解が深まれば幸いです。

昭和56年2月

まえがき

本冊子は、昭和54年度に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「石碑調査」の結果をもとにしてまとめたものです。

調査は、市内全域について実施し、調査対象とする石碑については、次の基準を設定しました。

- ・明治以前に建てられた碑であること。
- ・大正以後に建てられた碑であっても、特に著名と思われるもの。
- ・板碑、墓石、道標やいわゆる野仏といわれるものは除くこと。

以上の選定基準により調査をした結果、75件の石碑が報告されたが、本冊子の編集に当たっては、再度、上記の三つの観点と「碑名しか刻まれていないものは除く」という原則で検討を加えるとともに、調査漏れと思われる石碑を編集会議で選定し、これを加えて収録しました。

編集は、市文化財保護審議委員の岩崎良能氏と調査も担当した下記の市文化財調査員のうち※印の各位及び市教育委員会社会教育課の職員が当たりました。

●宇都宮市文化財保護審議委員会

野中退蔵(委員長)	雨宮義人(副委員長)
岩崎良能(委員)	森谷憲(委員)
富祐次()	谷田部康幸()
塙静夫()	阿久津浩()
小堀時蔵()	戸田博亘()
小林友雄(委員長)	辰巳四郎()
福嶋悠峰(委員)	

●宇都宮市文化財調査員

※黒川孝三(一条)	塚田賢照(陽北)	塚田宗雄(陽北)
加藤康熙(旭)	内藤二郎(陽南)	石川秀男(陽西)
釜井宗一(星が丘)	松本文一郎(陽東)	※平塚良雄(泉が丘)
※糸川弘明(宮の原)	直井茂吉(清原)	増淵藤四郎(横川)
菊池正仁(平石)	※坂寄悦男(瑞穂野)	小堀時蔵(豊郷)
手塚英男(豊郷)	半田勝(国本)	高山伝治(城山)
福田操(富屋)	※阿久津義正(篠井)	松本笑悦(姿川)
寺内弥三郎(雀宮)	小島豪市郎(雀宮)	

(※印は、編集員、()内は担当区域)

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

半田 昭 (社会教育課長)	河越 昌司 (文化振興係長)
定岡 明義 (文化振興係)	桜井 敬朔 (文化振興係)
木村 光男 (")	渡辺 卓 (")

掲載いしぶみ一覧

1 市指定文化財の石碑

- (1) 霧尾山人碑
- (2) 蒲生君平勅旌碑
- (3) 吉良八郎之碑

- (14) 御子貝君之碑
- (15) 釣伯佐藤翁碑
- (16) 老農篠崎君功績碑
- (17) 円山先生紀恩之碑
- (18) 六石県先生之碑

2 旧跡関係の石碑

- (1) 大砲発射之碑
- (2) 梅樹献木之碑
- (3) 古棺記
- (4) 鴛鳥塚之碑
- (5) 明治天皇臨賜醜處之碑
- (6) 鏡が池碑

4 文芸関係の石碑

- (1) 芭蕉句碑
 - ・能延寺の句碑
 - ・慈光寺の句碑
 - ・城山西小の句碑
 - ・宝蔵寺の句碑
- (2) 文可句碑
 - ・二荒山神社の句碑
 - ・鷺宮神社の句碑
- (3) 植桜碑
- (4) 雨情歌碑
- (5) 前田雀郎碑

3 人物顕彰の石碑

- (1) 山澤士弘之碑
- (2) 感恩報徳碑
- (3) 梅園春男翁之碑
- (4) 杏堂山口先生之碑
- (5) 戸祭産石之碑
- (6) 元信先生碑
- (7) 蒲生君平之碑
- (8) 倉井友敬先生碑銘
- (9) 飯村道積先生碑
- (10) 河内氏報徳碑
- (11) 贈従三位戸田忠恕之碑
- (12) 菊地愛山翁寿碣銘碑
- (13) 日下開山初代横綱力士明石志賀之助碑

5 その他の石碑

- (1) 戊辰役戦死記碑
- (2) 水戸之役戦死之碑
- (3) 第14師団建築記念碑
- (4) 明治37・8年戦役紀功碑
- (5) 大谷石材軌道之碑

1. 市指定文化財の石碑

(1) 霧厓山人碑



所在地 材木町6-11 (観専寺)
碑石高 192cm
建碑年月 安政2年4月
撰文者 大橋正順
書者 菊池教中
篆額者 中沢俊卿
指定日 昭和41年1月31日指定

解説

高久霧厓は、栃木県の誇る幕末の大南画家で、那須郡杉渡土（現黒磯市）に生まれた。

この碑は、霧厓を師とする観専寺住職黙雷上人が建立したものであり霧厓の人物、交友関係、業績などを明らかにしているばかりでなく、幕末における宇都宮の文化の高水準を物語っている。

人弟子也頃者欲樹山人碑于其山以爲瓣香之所而遠索余文顧余之於山人投契匪淺山人之權疾也使人招余余謁蹶
趨往而無及矣其妻今野氏孀孀孑立不能理喪事余爲出貲葬山人於谷中村天龍院則今日上人之囑亦有不可得而辭
者乃述其性行履歷余所聞見以示悠久如此山人有知未必不喜上人之厚其師與余言之不妄也

安政二年歲在乙卯夏四月

江都大橋正順撰文

宇都宮菊池教中書丹

長岡中澤俊卿篆額

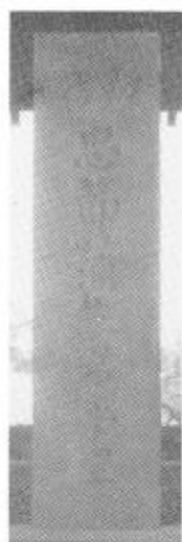
(碑文)

畫山水之有南北宗唐代啓其端而宋元已下分界益嚴矣蓋南北各挾其所長屹然對峙終不相下然要之北宗宜於台閣南宗宜於山林則苟寄情煙霞泉石者不以南宗爲準的哉我東方之於畫世不乏能手而其衣鉢皆出于北派末嘗有以南宗成家者也元和建鑾之後奎運大昌百事度越於古於是祇伯玉柳公美池貨成之徒專唱士夫畫而南宗凌輿鴻匠鉅家接武以出然求其純粹冲和副席西人毫無遜色者其惟靄厓山人歟山人姓高久諱徵字子遠如樵石巢疎林靄厓皆其號而靄厓尤著下毛州那須郡杉渡戶部人也其父以販鬻爲業而山人不喜商賈性酷嗜繪事如飢兒之求乳其來江都也執贄于谷文晁屹屹不知倦一日自省曰此工匠習氣耳豈高人逸士之所嘉尙哉乃刻意於池貨成筆筆規做人不能辨其孰爲真既而又悟曰貨成之畫氣骨有餘而筆墨不足末得爲醇乎醇也遂棄而不顧直師明清諸家真蹟沈潛窮究不啻晝夜凡聞有藏一名畫者百方懇請手自摹之累年之久摹本殆平柱屋梁後遊平安及浪華就古寺大刹縱觀其寶蓄畫噫嘻忘歸時有備後人纈幣求畫者山人返其幣曰聞子家素明人郭完雙條幸見惠借則吾可報以畫不然不作也其人驟馳价寄其幅山人大喜臨撫再四有所得乃作數幀以謝之其篤志如此既還江都則技益進識益高與邊華山原杏所榕椿山相角逐而皆無不斂衽避之者又與余岳父淡雅翁友善岳父愛古書畫如性命賞鑒頗入神而山人聯鑪齊驅其於畫也筆墨沈厚布置深穩韻高而意遠殆將摩雲林之壘以突北苑之藩籬矣於是乎聲名漸播遠邇持絹素來丐者趾錯於戶乃築晚成山房子藥研溝將大興南宗以廓清浮華之陋習而天保癸卯四月八日病發暴歿齡僅四十有八嗚呼得不於邑痛惜哉然而山人即世數年四方爭求其遺墨零縑斷齋珍之如拱壁識者評爲東方未曾有之畫則山人其亦可以瞑也夫山人爲人坦率靖曠不修邊幅儕輩咸推重之而絕無自滿之色其出門必以不律自隨苟遇一畫稍佳者不論南北不問古今模寫以收藏焉書亦清潤造美有明人風趣雖專門之士不能之先也其寓下毛鹿沼之日橐筆遊東奧獲金百兩而歸謂鈴松亭曰僕少小貧窶不得就師讀書深以爲憾今有此資財則可以支四五年願受估學於君以成素志乃日夜挾冊研鑽蒸動他日畫學之博蓋胚胎於此云是足以見其虛懷求益之槩則其技之進於道孰爲偶然乎哉宇都宮觀專寺主默雷上人山

(2) 蒲生君平勅旌碑



(左 面)



(正 面)



(右 面)

(碑 文)

左 面	正 面	右 面
藩文学教授戸田誠謹書	勅忠節蒲生君平里	宇都宮藩知事戸田忠友奉行

所 在 地 花房三丁目3 (東武宇都宮線と旧日光街道の
交差点北側)

碑 石 高 130cm

建碑年月 明治2年12月

書 者 戸田 誠

指 定 日 昭和36年9月18日指定

解 説

「寛政の3奇人」の1人と言われ、「山陵誌」の著者として有名な蒲生君平を顕彰した碑である。

君平は、明和5年(1768年)に旧新石町に生まれ、文化10年(1813年)に46歳で没している。

この碑は、朝廷が明治になって宇都宮藩に君平の遺功追賞を命じ、藩知事戸田忠友が奉行して建てられたものである。

(3) 吉良八郎之碑



所在地 桑島町401 (桑島町公民館)

碑石高 110cm

建碑年月 明治12年3月

撰文者 大橋正寿

書・篆額者 菊池徑政

解 說

吉良八郎は、茂木藩士で二宮尊徳の門人助手として高名であり、尊徳とともに県内各所の新田の開墾等に活躍した。

幕末には、菊池教中のもとで鬼怒川沿岸開拓の事業を大成させた。

碑は、この開拓の記念として建てられたものである。

(碑 文)

吉良君八郎之碑 東京 陶菴大橋正壽撰文

君諱貞篤波多氏本姓吉良氏稱八郎常陸谷田部藩人也考諱某稱吉郎兵衛爲郡奉行食祿二百石母長谷川氏君年十六失怙襲家廿二爲郡奉行後有故脫籍使嫡子武寬承家自復本姓時有真岡人二宮金次郎者以興民利有名君就學有年 幕府擢君爲真岡縣令屬吏君慨然以賑貧撫民爲志會家叔菊池教中嘗憂其藩宇都宮侯所領地多荒頓有捨產以開墾之之志請侯允之乃就岡本桑島二村開田若干町而以桑島村與真岡縣所宰相接教中與君締交百事賴爲君之勤勉從事立定制設教禁耕種通民利於是荒廢盡開人民安業明治三年秋鬼怒川暴漲奔潰橫溢蕩田沒盧君徒屨桑島村夙夜奔走嚴堤防開水利水患盡除民德之同五年壬申春罹病往苒不起七月五日終歿享年六十有四葬於同國芳賀郡物井村蓮乘院釋道潤身院義賢良忠明治維新之際君復歸舊藩稱波多氏改名以一君配廣瀨氏舉四男三女嫡子八太郎天二子武寬嗣長女適土浦藩関口氏二女適谷貝村農某氏餘皆天明治十一年戊寅七月實值君七周忌辰於是教中男經政恐君勤勞之績久而湮滅又憂其墓距桑島村數里不便時節展墓欲建石于其虛側以示永遠請文于余余乃按狀述概如此

明治十二年三月 得堂菊池徑政書及篆額

2. 旧跡関係の石碑

(1) 大砲発射之碑



所在地 石井町3255-3

(田崎重夫氏宅東)

碑石高 95cm

建碑年月 天明2年4月

解説

宇都宮家の家臣、鳥居流砲術士であった加藤義行がこの地区で行った鉄砲の発射で36町の距離が出たことを記念して、天明2年4月にこの碑を建てたものである。

(碑文)

戸田宇都宮家臣鳥居流
砲術加藤免遊義重行年
七十於沃野發壹貫目鉛
九至三十六町時
天明二壬寅年正月廿四日

(2) 梅樹献木之碑

所在地 花房本町2 (英巖寺跡)

碑石高 166cm

建碑年月 明治25年3月

撰文者 齋藤清公

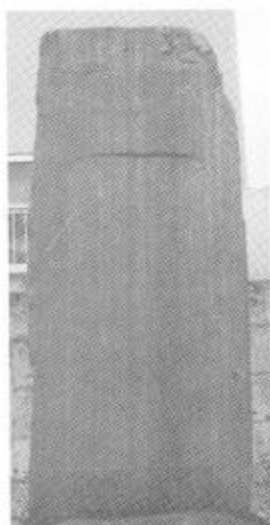
(碑文)

我遠祖友說寶曆文政之間仕藩主
天壽院公特受寵遇今庭有恩賜
之古梅樹花香馥郁亦多結實矣
予多年栽培而得二百株獻之先
公之廟前聊表微衷云爾
明治廿五年三月

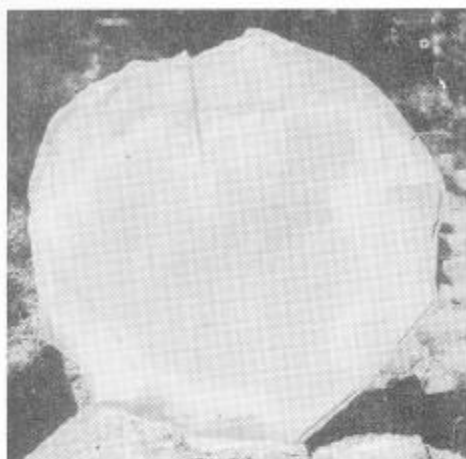
友說愛孫齋藤清公誌

解説

戸田氏の菩提寺であった英巖寺跡は、第2次世界大戦前までは梅の名所として有名であったが、その梅を植えたいきさつについて記した碑である。



(3) 古棺記



所在地 埴田五丁目1 (雷神社)

碑石高 130cm

建碑年月 明治26年3月

撰文者 鳥居竜蔵

解説

明治17年の県庁舎建築に際して、八幡山の南(二里山)から石棺が出土した。

石棺は、古墳時代のものであり、中から黄土と短剣・管玉等の副葬品を検出した。

黄土は、かめに収め御蔵山に埋め、副葬品は、博物館に納めて処理した。

石棺の出土からその処置の経過を記したのが、この碑である。

(碑文)

古棺記

下野國河内郡宇都宮之地有小丘焉曰二里山方遷柩木縣廳於宇都宮相其地
關樁葬焚茅剷高墳低以夷之而發一石棺長六尺餘橫二尺五寸開而觀之中
有黄土搜得短劍一口管玉十個白珠十二顆及以齒骨者五六枚意是貴族之墳
焉時明治十七年五月五日也黄土悉斂之瓮器物皆納之博物館棺面無一字跡不
知何人之墳也質諸古老諸微舊史不著也。然以棺之與玉劍考之蓋千年以物
云々或曰下毛野國之族未知其果是明治二十一年十二月二十八日柩木縣知
事正五位勳六等樺山資雄特納黄土於棺以瘞於御蔵山之下焉

(4) ^{おしどり}鴛鳥塚之碑



所在地 一番町1 (おしどり塚児童公園)

碑石高 116cm

建碑年月 明治27年8月

書・篆額者 戸田香園

解 説

鎌倉時代に無住法師によって書かれた「沙石集」によって紹介された物語の旧跡地に建てられた碑である。

内容は、求食川(あさりがわ)を舞台として1つがいの鴛鳥と獵師のいきさつと建碑に至るまでの経過を記している。

なお、この地は、市指定史跡となっている。

(碑 文)

此所の小流を求食川と呼び、其水上を求食沼と云昔此邊に獵師あり或時鴛の雄の首を射りて軀のみを得たり、明朝雌を射とめけるに其羽かひの下に雄の首を抱けり獵師これを見て發心し此所に埋めてしるしの石塔を建てしと在
此物語は無住法師の沙石集に載たり無住は梶原景時の孫宇都宮賴綱の室の甥なれば梶原一家亡びの後當所に来りて在りし故に聞書せしものなるべし、今此所の人々相はかり其要を摘み石に彫て後の人に告ぐ

